第五章　溝の帯Ⅲ

1

――痛い……頭がガンガンする……熱い……足の裏から頭の先まで熱くて茹(う)だりそうだ。

――涼しくなった――耳元を風が吹き過ぎる――今度は背中が痛い――落ちる――落ちる。

ドスン。落下感が突然消え、体全体が壁に打ち付けられた――ような気がした。

ゆっくりと眼を開けてみる。ごろごろとした岩が見えた。頭痛は多少残っているものの、今度は体の節々が痛くなってきた。肘を上げてみた。

あっ。体毛だ!!　ベージュだ……!!　また猿人の世界に来てしまったんだ!!

痛っ。怪我してる。体の数カ所から血がにじみ出ている。どうしてこんなことに。

小首を傾げたとき、頭上からガーっという奇声が落ちてきた。見上げると誰かが落ちてくる。ぼくはあわてて背にしていた垂直の壁を離れた。ああ、ここに壁があったのか。

声の主はドシンと尻餅をついた。やはり猿人で、しかも姉だった。イタタタと顔を顰(しか)めてる。続いて同じよう

に声がいくつも上空から降り注いで、幾人ものベージュ族が頭から、肩から、地面に落下してきた。中には打ち所が悪かったのか、気を失って伸びているのもいる。

最後は大男さんだった。彼は傷の癒えてない父を担いで、スピードが付かないよう器用に滑り降りてきた。彼が最後尾だったらしい。

誰も彼も傷を負っている。それぞれ肩で息をしながら、手近の者を介抱している。

――みんなボクの後に付いてきたんだ。

声がした。左右を見回したが声を掛けてきたような者はいない。誰だ？

――みんなを引き連れて逃げてきたんだ。

これは最初のブラウン族との戦いの後で頭の中に響いた声だ。思い出した。これはこの世界のぼく自身の声だ。その瞬間、〝記憶〟がよみがえった。いや〝ボク〟が見せてくれたと言うべきか。

《〝溝の帯〟から姉といっしょに帰ってくると、ブラウン族が我がベージュ族を襲撃してきた。多勢に無勢。まさに絶体絶命だった。そのとき大男さんが木ぎれをたくさん抱えて現れた。ぼくがしたみたいにこれで戦えと仲間に手渡した。その大男さんでさえ木ぎれを振り回すという行為は最初とてもぎこちなかったが、やってる間にだんだん様（さま）になってきた。何人ものブラウン族が倒さ

れた。ふだんから四本足歩行の仲間たちは木ぎれを手に持つことすらままならず、結局役に立ったのは、ぼくと大男さんと姉ぐらいなものだった。形勢は不利だった――≫

2

ボクがぼくに見せる記憶の映像は、姉が地底世界へ続く洞穴で見せてくれたのと同じぐらいリアルなものだった。言葉を持たない猿人たちはこうやって意志のやりとりをしているんだろうか……。

≪――ブラウン族の攻撃は「引っ掻く」「噛みつく」だけだ。ボクや大男さんはよく奮闘した。でも数の違いは圧倒的で、ボクたちは見る見る押されていった。それでも退いた方向が良かった。先だっての地震の時にできたばかりの丘の上に追い詰められたボクらは逃げ場を失ったと思ったが、大男さんが足元の石を両手で掴むとどんどん転がし始めた。それは面白いように転がり落ちて、ブラウン族に届くときには危険な飛び道具になっていた。ボクも姉も、仲間たちも真似をして次々と転がした。大きな岩を協力して動かすと、ものすごい土煙を上げて落ちていった。ブラウン族らは悲鳴を上げて逃げ惑った。しかし安心はできない。

そのときドーンという大太鼓を叩いたような音がして大地が縦に揺れた。一瞬遅れて赤い光と熱波がボクたちを襲った。目と鼻の先にある火山が噴火したのだ。ナマで見たその光景は美しかった。しかし爆発で吹き飛ばされた岩がこちら目がけて飛んでくるのが見えた。逃げなければ！　後ろを見ると何もなかった。文字通り崖っぷちに追い込まれていたのだ。火山がまた炸裂音を轟かせた。ものすごい熱波だ。いけない。ボクは深く考えず、大きな声を上げて崖下に飛び降りた。

そこからは君の知っているとおりだ――≫

君？　つまりぼくのことか。

映画館の上映が終わるように、映像は消えた。

ぼくたちのいる場所は、ちょうど崖によって熱波や火山弾から守られていた。ブラウン族はどうなったろう。全滅したろうか。

姉がそばに寄ってきた。ぼくの腕に手を置いて問いかけてきた。

――大丈夫？

ぼくは「大丈夫だよ」と心の中で答えた。姉にはそれで通じた。

――父も無事。義母も義弟たちもいるわ。

よかった。残念ながら何人かはブラウン族に噛み殺され、何人かは噴煙に巻かれて命を落としたろう。逃げ延

びたのは総勢五十人ぐらいだ。
大男さんが近寄ってきて、ぼくの肩に手を置いた。見れば見るほどタンクさんに似ている。
――ここから先は、君が連れていってほしい。
何だって!? ぼくなんかが？ 彼の眼は「そうだ」と言っていた。他の皆も同じ想いを含んだような視線でぼくを見つめていた。

3

――そう、君ならできる。
ボクの声が囁(ささや)いた。それはぼくの背中を押した。ぼくはスックと立ち上がった。二本足でしっかりと背筋を伸ばして。仲間たちが声にならない声をあげてぼくを見上げた。ぼくは迷わず〝溝の帯〟を指さした。おそらくこの世界で、進むべき方向を指で示す行為をしたのは、ぼくが史上初だろう。
――OK。進もう。
大男さんは全員を見渡し、大きな声で吠えた。
道のりは険しかった。火山の噴火と共に発生した地震はいっこうに収まらなかった。大きな揺れが来るたびに地面は崩れたり隆起したりで地形はどんどん変化した。

木々はなぎ倒され、森は飲み込まれ、川は形を変えた。噴煙が雲のように空を覆って太陽の光を遮(さえぎ)った。

午前中にここを歩いたときに見た崖の高さが、明らかに変わってる。〝溝の帯〟は地震によってますます断層を深くしているみたいだ。ぼくたちは生き物のように蠢(うごめ)く大地の上をひたすら進んだ。

ぼくがあえて危険な〝溝の帯〟に進もうと言った理由は、敵のブラウン族は絶対に追ってこないと踏んだからだ。すでにここからは鳥やその他の動物さえ姿を消している。動物たちは本能で危険を避ける。つまり、ここを抜けて反対側の崖を登れば、ブラウン族の追っ手から逃れることができるのだ。

仲間たちがそこまで理解してくれているかどうかわからないけど、いっしょに父を支えて歩いている大男さんには通じているようだ。

最初は元気に進んでいたぼくも、太陽が崖の彼方に沈む頃には、気持ちも沈みそうになっていた。

まず三人がいきなりの地盤沈下で地中に飲み込まれた。次いで五人が細い崖沿いの道から谷底に落ちた。ぼくは胃袋をぎゅっと絞られる思いがした。ぼくが選んで示した道だ。みんなをわざわざ危険の中に呼び込んだのでは……。それでも途中であきらめなかったのは、大男さん

が信頼してくれていたからだ。もちろん姉も。
手を貸しながらなんとか連れてきた負傷者たちも次々と脱落していった。陽がとっぷりと暮れた頃、仲間の数は三十人あまりに減っていた。
夜が来た。月は見えない。相変わらず火花を揚げている火山が〝溝の帯〟の高所を真っ赤に照らしているが、ぼくたちのいる溝の底は真っ暗だ。
みんな疲れ切っていた。先は長い。ぼくたちは危険を承知で、ここで一夜を過ごすことにした。

4

倒れた樹木から木の実をもいだりしながら、ここまでやった来たけど、明日からは食べ物が見つからないかもしれない。早く対岸の崖を登らないと飢えて死んでしまう。それ以前に、いつまでもこんな危険地帯にいるのは猿人たちにとって不安なはずだ。何人かが谷底へ落ちたのは、我慢できずに垂直な崖をよじ登ろうとしたからだ。
地面が小刻みに揺れている。仲間たちは身を寄せ合って寝ている。まるで電車の中で眠りこけるサラリーマンのようだ。この電車の運転手はぼくなのか……。考えるとますます寝つけない。ぼくにもたれながら眠っている姉はさっき、こう言った。

――あなたの眼は私たちより遙かにいいわ。私たちには遠くが見えない。その眼で登れそうな場所を探してちょうだい。

そういえば博士が言ってたっけ。猿人はジャングルからサバンナに出ていくことで進化したと。ジャングルでは眼よりも鼻が重要だ。遠くを見る必要がない。サバンナは身を隠す物がないので、敵をいち早く発見しなければならない。そうやって人類は視力が良くなって……。

気がつくと夜が明けていた。灰色の空はそのままだ。ぼくたちは再び歩き始めた。誰の顔にも疲労がにじみ出ている。

見渡す限り、屏風のような崖が左右に延々と聳(そび)えている。どちらの崖もできたばかりだから、あちこちで落石が起こっている。いったいどこまで歩けば登れるんだろう。ぼくには判断できない。こんなことなら父さんに山へ連れて行ってもらうんだった。仕事に追われる日々の父さんにそんな時間はなかったけれど……。

見覚えのある樹木に行き当たった。地下に通じる洞穴の目印の木だ。まだこんな所までしか来ていなかったのか！　怪我人連れだからしょうがないとはいえ。姉も同じ思いなのか虚ろな眼をしている。洞穴は、と探したが、

どこがそれだったのかもはや分からなくなっていた。
ぼくは首を振って木を登った。さすがに根の太い木だけあって、地震にも倒れなかったらしい。樹上からの見晴らしは良かった。そして行く手を眺めたとき、文字通り眼が点になってしまった。大きな湖がそこにあった。いつの間に……。昨日はこんなもの確か無かったはずなのに。両側の崖から湧き出る地下水が滝となって湖に注ぎ込んでいた。

5

この前ＮＨＫスペシャルの世界遺産特集で見たどこかの湖よりも、この風景は遙かに美しく迫力がある。ぼくはしばらくの間、見とれてしまい、姉がすぐそばに登って来たのにも気づかなかった。
――どうする？
言われてぼくは考え込んだ。湖を迂回するとなればサイズが大きいだけに、左と右のどちら方向に回ってもかなりの遠回りになる。
木の上に腰掛けたまま、真下の水辺を覗き込んだ。できたてホヤホヤの湖は、注ぎ込む川が持ってきた泥土のせいでミルクコーヒー色をしていた。ぼくはエイッと枝を蹴って、爪先から湖にダイビングした。後ろで姉が驚

きの声をあげた。
ドボンッ。水深は結構ある。浮かび上がったぼくは仲間たちが見てる前で、平泳ぎをやってみた。大男さん始め全員が目を丸くして見ている。温泉に浸かる猿なら分かるが、泳ぐ猿人は珍しいのだろう。幼少の頃に米沢の川や池で泳いだのが役に立った。しかしここでクロールやバタフライなんか披露したらみんな引いてしまうだろうな。
岸に上がると、呆気にとられたままの彼らに向かって対岸を指さした。泳いでいくぞ！　と。

準備が始まった。元気な者は見よう見真似で泳げばいい。しかし問題は怪我人だった。道具もなしに船を造ることはできない……。
湖をバックにしばらく考え込んでいたぼくは、これしかない、と大男さんを呼んだ。
「ずっと前に倒れた、大きな木を探して下さい」
大男さんは、そんなものどうする、と尋ねることもなく何人かの元気な仲間を連れて、森の中に入っていった。森と言ってもこのあたりの樹木は昨日の大地震でほとんどが薙ぎ倒され、大小さまざまな岩石の混じった〝ごった煮〟状態だ。
ぼくは姉といっしょに蔓草（つるくさ）を探した。できるだけ長く

て、紐の代わりに使えそうなものを。
やがて大男さんらが巨木を引きずって戻った。ぼくはそれを湖に入れた。大丈夫だ沈まない。十分に乾いているようだ。ぼくは怪我人の体を巨木の上に乗せて蔓草で縛りつけた。〝紐を結ぶ〟作業もぼくにしかできないので随分と時間がかかった。最後に父を幹にかぶさるように乗せて固定したところで完成だ。
「元気な者は木に掴まって泳いで行って下さい」
ぼくらは湖に体を入れた。そして木を押しながら静かに泳ぎ始めた。心配はどうやら取り越し苦労だったようだ。自然の筏（いかだ）ベージュ号は予想以上にうまく湖面を進んでいった。

6

殿（しんがり）になったぼくは巨木船のスクリュー役をつとめた。バタ足をしたり、疲れると蛙泳ぎをしたり。仲間たちの動作は泳ぐというよりも木に掴まって水を掻いている程度だったが、彼らにとっては初泳ぎだろうからしかたがない。
しばらく泳いでいて気づいた。猿人に泳ぎは不向きだということに。体毛が濡れると体が重くなるのだ。これは計算外。ベージュ号の進みは徐々にのろくなったが、

それでも着実に進んでいた。
――あなたはいつ泳ぎの練習をしたの？
そばにいた姉が尋ねてきた。「泳ぎ」という言葉、というか意味は彼女が知るはずもなく、彼女の考えがぼくの頭の中に伝わった時点でぼくの言葉に翻訳されているのだ。
――こっそりとね。
ぼくの言葉に彼女は納得していないようだったが、笑ったような顔をして視線を反らせた。そのとき、彼女が水を掻く手を止めた。何気なくその視線を追ったぼくも彼女が眼にしたものを見た。
灰色の空と崖の間に動くものが見える。
ライオンだ。ライオンが獲物に襲いかかっている。その獲物は……なんと猿人だ！　遠くてアリのようにしか見えないが、ブラウン族の猿人たちが数頭のライオンに追われ、襲われていたのだ。ぼくは声を出すこともできなかった。
追われているブラウン族の数は多かった。中には乳飲み子を抱えた母親の姿も見える。男たちはライオンに牙を向いて立ち塞っているが、全く歯が立たないようだ。
――恐ろしい。
姉の視力では詳しく見えない。彼女はぼくの肩を手でつかんで、ぼくの網膜に映った映像を見ているのだ。

――火山の噴火や地震に見舞われて、今まで居たところに住んでられなくなったんだわ。私たちと同じように移動している最中を襲われたのね。ライオンたちも天変地異で獲物が減ったものだから、日頃は目もくれない猿人を襲い始めた……。

最近覚えた「阿鼻叫喚」という四字熟語を思い出していた。ライオンの数は多かった。猿人たちは次々にそのアゴの餌食になるか、崖の上から千尋の谷底へ飛び降りるしかなかった。

かわいそうに。ぼくは目を逸らした。そのとき彼らの先を逃げる一団が眼の隅に入った。先頭集団はどうやら崖を降りることのできる地割れを発見したようだ。そこから我も我もと駆け下りてくる。ライオンに立ち向かった猿人たちの働きは無駄じゃなかったんだ。ぼくは思わず応援していた。

7

猿人たちは崖の裂け目を、途切れることなく逃げてくる。後から後から転ぶようにして。

――私たちも〝溝の帯〟に逃げ込まなければ、ああなったでしょうね。

姉が目を伏せてつぶやいた。でもぼくらだってまだま

だ安全だとは言えない。この先どうなるのか……。
崖に亀裂が走った。
それは瞬(またた)く間に拡がった。ワンテンポ遅れて音がぼくたちの耳に達した。泳ぐのに夢中で気づいてなかった仲間たちも顔を上げた。
崖は、上の方から屏風を倒すように落ちてきた。ブラウン族の猿人やライオンを天辺(てっぺん)に乗せたまま。その様子はまるでスローモーション映像のようにゆっくりとした動きだった。
なんという光景だろう。
切り取られた崖が、谷底つまりぼくたちのいる〝溝の帯〟に落下した衝撃は大きかった。それは砂まじりの突風としてぼくたちに届いた。
やがて埃が晴れた。しかしブラウン族の悲劇が他人事ではないことに気づいたのはまさにその時だった。崩れた崖の先端がいくつも湖に落ちたのだ。それによって津波が引き起こされ、ぐんぐんとぼくたちの方へ押し寄せてくる！
全員が悲鳴を上げた。
「急げ！」ぼくは叫んだ。
疲れ切った体に鞭打って、みんな必死に水を掻いた。
掻いて掻いて掻きまくった。
津波は刻々と迫ってくる。水を飲んで激しく咳き込み

ながら横目で見上げると、波の高さは絶望的だった。あんなのにやられたら……。

津波の先駆けに、山のようなうねりがぼくたちの船を襲った。ひっくり返ることはなかったものの、高々と持ち上げられたベージュ号の乗組員は生きた心地がしなかった。

しかしうねりに乗せられたことが逆に良かったのだ。ぼくたちは泳ぐよりも速く対岸へと運ばれた。

「もう少しだ！」

ようやく先頭の大男さんが岸辺に上がった。彼は倒れ込む間もなく、巨木船を引っ張った。しかし砂にのめり込んでなかなか動かない。

「紐を切るんだ！」

ぼくの叫びに呼応するように大男さんは怪我人を固定していた蔓草に噛みついた。ぼくも父の体を解いて背負った。全員岸辺を高台に向かって駆け上った。「走れ、走れ！」

津波の先端が岸辺に到達した。悲鳴があがった。

8

ぼくは弾かれたように振り返った。

姉だ！　ただひとり波間に取り残されてしまっている。

沖に返す波が悲鳴をあげる姉を、深みへ深みへと引きずり込んでいく。

ぼくは大男さんに「父を頼みます」と目で伝えると、彼が止めるのも聞かず、波打ち際に取って返した。助けられるとしたら泳げるぼくだけだ。ぼくは迷わず湖に飛び込んだ。

姉はどんどん沖へ流されていく。ぼくは近づこうと必死に泳いだが、第二波の津波がぼくたちを巻き込んで、岸辺とは別の方向へと押し流した。

ぼくは海面に顔を出しては酸素を吸い、泳ぎ、波に飲まれてもがき、また海面に浮上する。その繰り返しで、体から徐々に力が奪われていった。

姉はかろうじて漂っていた木に掴まっているが、そこまでの距離がなかなか縮まらない。

そうこうしているうち、水が急速に流れ出した。どうしたのかと顔を上げると、水は崩れた崖とは反対方向に流れていく。ぼくも姉もされるがまま引きずられていくしかなかった。

行き着く先に――岸辺はなかった。激しい津波が、できたばかりで柔（やわ）な湖の端っこを突き崩したのだ。

そこは滝となってぼくたちを待ち構えていた。

逃げようがなかった。

ぼくと姉は滝の上から真っ逆様に落ちていった。

眼の前をカブト虫がのそのそ歩いてる。見たこともない形だ。わずかに差し込む光に照らされ、体がキラキラと輝いている。カブト虫のくせに〝黄金虫〟だ、フフフ。

光はどこから来るんだろう。なま暖かい風が鼻先をくすぐった。誘われるように首をめぐらせたぼくは「うわあ……」と声を上げた。

黄金のプラネタリウム。満天の星。

ここは宇宙空間？

ぼくは立ち上がって、おそるおそる近寄った。

光る物体は宇宙に浮かぶ星ではなかった。ちゃんと手で触れることができる。見た感じはまるで〝黄金〟そのものだ。

アフリカは黄金の産出量が多いと社会の時間に習ったことがある。とすると、やっぱりここは博士の言うとおり、アフリカなんだろうか。

まさにプラネタリウムがすっぽり入りそうな広さ、いちめんの壁に埋め込まれた黄金。女性が見たら卒倒するだろうな。

女性――そうだ、姉さんはどこ行った⁉

ぼくはあわてて周囲を探した。

9

黄金の塊(かたまり)は、壁だけではなく地面にも無数に埋まっていて、足の踏み場もない。ひんやりした黄金の感触が足の裏から伝わってくる。天井のわずかな裂け目から差し込む陽光が黄金に反射して、ドーム全体をまるで教会のような厳かな場に仕立て上げていた。

滝壺に落ちたぼくは、ここまで流されてきたらしい。わずかに水が溜まっている。だとすれば姉さんもきっとどこかにいるはずだ。

「アーアー（姉さん）！」

叫んでみたが、谺(こだま)があちこちから返ってくるだけだ。気を失ってるのか、怪我で声が出せないのか、それとも別の場所に流されたのか……。

ドームからはいくつもの洞穴がさらに奥へと続いていた。それぞれの前に行って呼んでみたが反応はなかった。弱った。これじゃ探しようがない。

ドームの中央に戻り、黄金塊のひとつに腰掛けた。高価な椅子だ。黄金のカブト虫が足先をトコトコと横切っていく。この虫は天井の裂け目から入ってきたのだろう。いいな君は。羽があって。

突然ヒタヒタと足音がした。振り向くと洞穴のひとつから三人の猿人が踊り出てきた。逃げる暇なく、ぼくは彼らのひとりに殴り飛ばされた――。

――お願い。眼を開けて。
姉の優しい声。それがぼくを揺り起こした。殴られた頬に激痛が走って思わず顔をしかめた。薄目を開けると姉の心配げな顔がそばにあった。
「無事でよかった」。姉は眼を潤ませているんだろうか。わずかに動いた目尻や頬に「心配」、「安心」といった人間的な表情の芽生えを読みとれた気がする。
姉の眼がぼくの後ろをチラと見た。ぼくも背中に視線を感じてそちらを見やった。そこにはさっきの襲撃犯三人組がぼくを見下ろしていた。
ぼくはもういい加減、驚くことはないだろうと思っていたけど、今度も驚いた。三人組はなんとなんと博士の研究所を襲撃した凶悪トリオ、キョウスケ、ムネオ、サユリのバッド・エイリアンズに生き写しだったのだ！
もちろん額（ひたい）を押し込んでアゴを前に引いた猿人ふうにアレンジしないといけないが。
ぼくは苦笑した――つもりで背を丸めた。それが気に食わなかったのか、猿人ムネオがぼくの尻を蹴飛ばした。姉がキッとムネオを睨みつけた。
猿人キョウスケはなにやら喚（わめ）き始めた。
――彼らはあなたに〝溝の帯〟の抜け道を教えろと言ってるのよ。

10

――あなたは前の戦いの時から眼を付けられていたそうよ。

やはりぼくは目立つ存在だったのか。

――〝溝の帯〟に降りていく私たちを見た者がいて、きっと安全な場所にくぐり抜ける近道を知ってるんだろうと思ったらしいの。だから彼ら一族も思い切ってここまで降りてきたんですって。

「一族」。その言葉を裏書きするように、三人組の後ろの暗闇からいくつもの顔がこちらを覗き込んでいた。小さな子供や女性もいる。

「ここはどこなの？」

――彼らは〝溝の帯〟に降り立つと、帯に直角に走る亀裂を道にして歩いてきたそうよ。猛獣に追われて、崖崩れに見舞われて、その時点で人数の半分は失われていたそうだけど……。それだけに彼らも必死なのね。火山弾や崩れ落ちる岩を避けて歩いてるうち、だんだん地下の道へと迷い込んでしまったらしいの。だからここがどこなのか分からないと言ってたわ。私はこの先で地下水が溜まってるところにひっかかってたの。あなたも無事でいてくれて嬉しかったわ。

姉はぼくを抱きしめてくれた。肌のぬくもり。この感触、どれぐらい振りだろう……。

猿人キョウスケが爪先でぼくの背中を小突いて急き立てた。この迷路の地下道から早く連れ出せというのだ。彼らも仲間を引き連れている責任があるのだろう。人類バージョンの三人組に比べれば、遥かに立派だ。

ぼくにだって道は分からない。方向すらつかめない。でも……でもここで「知らない」なんて白状したら噛み殺されるだろうか？

猿人サユリがぼくの腕をつかんで引き起こした。焦る気持ちが伝わってきた。いまは逆らわないほうがいい。こんな場所で姉を連れて逃げ切る自信はない。

ぼくは天井をぐるっと見回して、調べるような素振りであちこち歩き回った。鼻をフンフンと鳴らしたり地面に耳を押し当てたり。それで何が分かるというわけじゃない。あくまで時間稼ぎだ。彼らも、ぼくが調査していると思いこんだらしく、離れてじっと見守っている。いや監視か。

いくつかの脇道へも入ってみた。懐中電灯も、ローソクすらもなしに先がどうなってるか知ることはできない。ただ、ひとつ気づいたことがある。風が通る道があるのだ。天井の裂け目から入った空気が抜ける道がある。これは確信が持てた。

脇道のいくつかには、難民となったブラウン族たちがいた。ひとりとして無傷な者はいなかった。

11

父さんの蔵書に野戦病院の様子を撮った写真集があった。いくつも並んだベッドに臥せた兵士たち。手足がない人もいた。

今ここに横たわっている猿人たちにも血の滲んでない者はひとりもいない。人間の場合より悲惨なのは薬も包帯もないことだ。おそらく瀕死の重傷を負った者は、途中で打ち捨てられたろう。

ウウウ。猿人キョウスケがもう我慢の限界というように牙を見せて脅した。ぼくはキイと一声叫んで、洞穴のひとつをアゴで指した。

最も風音の強い穴を選んだのだ。

キョウスケは疑わしげな眼でぼくと洞穴を交互に見つめていたが、やがてムネオの尻を叩いた。ぼくを連れて調べてこいと言ってるらしい。姉はサユリに見張られている。人質だ。

ぼくはキョウスケに、姉に手を出したら承知しないぞと、ひと睨み利かせてから洞穴に入った。ムネオが後からついてきた。

洞穴はやや下りだ。黄金の塊がいくつも頭を見せているが、やがて光が届かなくなると何も見えなくなった。足元はところどころがパックリと口を開けていて危険だ。手探りで進むしかない。

時間にして五分ほど進んだろうか、周囲が明るくなってきた。かすかに音がする。さらに進むとドドドという地響きを感じ始めた。

最後の曲がり角を折れると、視界が開けた。

なんという光景だろう。

音の正体は滝、溶岩の滝だった。ぐつぐつと燃える流れが、左上から滝のように落ち、眼下を強烈な熱を発しながらゆっくりと移動して、右の谷底へと消えている。

まるで地球の血管だ。ぼくたちは地球の体内に侵入した病原菌のようなものだ。あんな煮え立った中に落ちたら、白血球に襲われた細菌のように、ひとたまりもないぞ。

熱い光に当てられ、のぼせたように溶岩を見つめていた。後ろからムネオが突いた。「どうするんだよ」とでも言いたげに。

左右を見渡しても、どこにも道はない。ここで行き止まりだ。風はどこか先へと抜けてるのだろう。確かめる方法もない。溶岩流の向こうには荒削りの地肌が見える。ここから何百メートルという距離だ。とても越えるのは

無理だ。
振り向いてムネオに「あきらめろ」と言おうとした瞬間、グラリと揺れた。大きな船がローリングするように、ゆら～りといった感じだった。ぼくはあわてて手近の岩に掴まったが、ムネオは悲鳴を残して溶岩流へ落ちていった。

12

猿人ムネオが溶岩に飲み込まれるまで、ぼくの眼は瞬(まばた)きもせず彼を追い続けた。その姿が溶岩に没した瞬間、ぼくは大声で叫んでいた。
熱い空気が頬をなぶる。石礫(いしつぶて)が体に降り注ぐ。僕は頭を抱えたまま必死で岩にしがみついていた。
もう我慢の限界だ！　いい加減にしてくれ！

なんでこんな思いばかりしなきゃいけない？
ぼくはまだ十歳の子供なのに！
大好きだった父さんを犯人呼ばわりされて。
その父さんの命をを奪われて。
母さんだって黄昏(たそが)れたままで。
波多野のおじさんにも裏切られて。
近所のおばさんらに冷たい仕打ちを受けて。

悪党三人組にひどい目に遭わされて。
……これでもまだ足りないっていうのか！

落下していく猿人ムネオの絶望的な顔が瞼の裏に焼き付いてる。哀れな声が耳にこびり付いてる。振り払おうとさらに大声をあげても、消えるどころか何度も何度もよみがえってくる。
現実の世界でも、逃げたくなる事ばかりなのに、どうして夢の中でまでこんな思いを――。
夢？　……これは夢なのか？
考えもしなかった。
あまりにリアルだから？
夢の中で「これは夢だ」なんて思わない。それは夢の証（あかし）であり、だからこそ起きてる時「あれは夢の話だ」と片付けられたんじゃないのか？
なのに今、夢だと思った。どっちが正しい？
夢だとしたら、誰が溶岩に飲まれようが、岩の下敷きになろうが、気にすることはないのか？

大きな地震に襲われて。
火山が噴火して逃げまどって。
湖を必死に泳ぎ渡って。
津波に押し流されて。

仲間たちが何人も目の前で命を落として。
……どうして夢の中でまで、こんなつらくて怖くて、イヤな思いをしなきゃいけない!?
夢なら覚めてくれ！
そもそもなんでぼくは猿人の夢なんか見てるんだ？
博士は、ぼくの知らない知識が含まれてるようなことを言った。おかしいじゃないか!?
これは本当に夢なのか？
夢だとしたら、どうしてこんな夢ばかり見せられるんだ！

13

ガクンと地面が傾いた。足が滑った。
驚いて開いた眼の前で、ぼくの乗る岩盤に亀裂が走り、みるみる広がった。崩れる！
岩盤がぼくを乗せたまま、ものすごい音をたてて溶岩流の谷底へと落下し始めた。
怖い！　助けて！
ぼくはこんなところで死ぬ!?
わけもわからず猿人として消える!?

――いまにわかる。

突然、周囲が無音になった。声はその中を弾け飛んだ。

「ボク」の声だ。

――〝いまにわかる〟

何かを納得したわけじゃない。恐怖が消えたわけじゃない。でも……その言葉にぼくは、地獄に堕ちたカンダダの前に垂らされたお釈迦様の糸を見出した。井沢先生が軽やかに教科書を読み上げる声と共に……。

《君ならできる》。大男さんは言った。

姉さんがあの穴の向こうでぼくを待ってる。傷ついた猿人たちも待ってる。ぼくの手の中にある細い糸の先にぶら下がって――。

切っちゃいけない！

ぼくは眼を剥いた。いろんな考えが頭の中を行き過ぎたのは、ほんの一瞬だ。

地面を蹴った。つかんだ岩をバネにして跳んだ。

目測している暇はなかった。無我夢中だった。　右手の指先がかろうじて崩れ損ねた岩に届いた。しかし左手は空を掻いた。

だめだ。落ちる！

その時、右手をヒシとつかむ者があった。

顔を上げてぼくは自分の眼を疑った。猿人サユリだっ

たのだ。ぼくの体は軽々と持ち上げられ、地面に放り投げられた。

ようやく地震が治まってきた。

サユリはしばらく左右を見回してから、ぼくに吠えかかった。ぼくは谷底を指さして猿人ムネオが落ちたことを告げた。彼は信じられないという顔をしてぼくに殴りかかった。

その腕を何とかつかみ、思い出したくない情景を今一度頭の中に再生した。

通じたのか彼はがくっと膝を落とし、しばらく谷底を見据えたまま動こうとしなかった。

彼にとってはぼくよりショックが大きいはずだ。たぶんムネオを心配して後を追いかけて来たんだろう。気の毒なことをした。

14

ぼくは人が死ぬところを見たことがなかった。父さん方の祖父母は、とうの昔に亡くなってるし、親戚の数が少ないのでお葬式に出た経験もない。

数年前、幼児連続殺傷事件が起き、十代の若者が犯人というケースが増えた頃、学校で「命の大切さを教え

る」授業があった。ぼくにはピンと来なかった。誰がどう悲しんだとか、どんなにつらいかとか、そんな話を聞かされても、小説や映画と同じ絵空事にしか思えなかった。

それはたぶん見ず知らずの人の死だったからだ。ここにたどり着くまでに死んだ仲間たちも、よくは知らない者ばかりだったから耐えられたんだ。いや、やっぱり絵空事なんだ。

死んでしまった猿人ムネオ。人間のムネオには研究所で拉致されそうになり、ひどい仕打ちを受けた。猿人ムネオにも良い感情は持てなかった。それでも、多少関わった者が恐怖で顔をひきつらせて落ちていく一部始終を見てしまったんだ。溶岩に消える直前の表情まで。

良い人悪い人を問わず、自分の知る人が死に行く様子を眺めるのが、こんなにイヤなものだとは……。死者の想いを託されたような気がする。いつまでも消えないような強烈さで。

もしかしたら、これが「命の大切さを知る」ことなのかも知れない。身近な人の死……。

父さん。

ぼくは父さんの死に目に会えなかった。

ぼくと母さんの元に帰ってきたとき、父さんはもう灰になってた。だからぼくの中では、父さんの死がすっぽ

りと抜け落ちてる。実感できてない。
父さんの思いを受け止めそこねたんだ。
最後の瞬間、父さんはぼくを思い出してくれたろうか。きっと思い出してくれたはず……。

ぼくと猿人サユリは無言で長いことそこに腰掛けていた。風が肩先を吹きすぎていく。カラコロと火山岩の落ちていく音が洞内に響いてる。その斜面を無意識に見上げると――。
えっ。
道ができてる。どうして？
サユリも気づいて立ち上がった。
さっきまで急斜面の崖だったところに、斜めに道が走ってる。
かろうじて人ひとりが歩けるほどの幅の道が。
地震が作ったんだ！　地面を揺らしたパワーが、断層に沿って斜面を割り、それが道になったんだ。
道の先は倒れた岩盤へと続いてる。岩盤は溶岩流の上に、まるで橋のように横たわっていた。

15

溶岩流が発する熱を冷ますように風が吹き抜ける。そ

れは溶岩を跨いだ太鼓橋の巨岩を舐めて、奥へと吸い込まれていく。舞い上がった砂煙が、風下はこっちだと教えてくれてる。

ぼくはサユリの肩を叩いて、もと来た道を指さした。サユリはうなずいた。

洞穴は思ったほど崩れていなかった。せまかったのが幸いしたようだ。足元に散らばる石くれの数が来るときより増えていて、踏んで怪我しないよう注意しながら足を運んでいたら、帰りは何倍もの時間がかかってしまった。

緊張の面もちで待っていたキョウスケは、ムネオの死に、顔を曇らせたが、道があることを聞いてホッとしたようだ。姉もぼくの無事を喜んだ。

キョウスケはすぐ全員に出発の号令をかけた。怪我人は元気なものが背に負った。

猿人たちの行列は黙々と洞穴を歩き抜け、やがて溶岩流の崖っぷちに出た。できたばかりの崖道は滑りやすかったが、なんとか全員、太鼓橋の手前まで到着することができた。

ここで予想以上の難関が待ち受けていた。

橋に見えた岩は、正面から見るとギョウザのような形をしてる。歩いて渡れる場所がない。

ステゴザウルスが溶岩の上に両手足を突っ張ってる絵

を想像すると近いだろう。
キョウスケがぼくに向かって「おまえが先に行け」とアゴで命令した。やっぱりな。
何十人ものブラウン族と姉の視線を一身に受けて、ぼくは橋を渡り始めた。両手で尖った縁(へり)につかまり、足で体を支えながら斜面を横向きに進む。
かなりきつい。股の間から、溶岩がゴゴゴと低音を響かせて流れているのが見える。熱気に尻が熱くなってきた。早く渡りきらないと保たない。
ぼくは脂汗を滴らせながら、15分ほどかけてようやく対岸にたどり着いた。筋肉が悲鳴を上げてる腕を大きく振って、到着を知らせた。
でも本隊はなかなか渡ってこようとしなかった。なにをしてるんだろう。相変わらず地面は休むことなく揺れ続けており、不安がかき立てられる。この橋もいつ崩れ落ちないとも限らないのに。急いでくれよ。
落ち着かず、対岸と溶岩流を交互に見やりながら、イライラして待ち続けた。
いったん戻ろうかと考え始めたとき、ようやく彼らは渡り始めた。誰もがおっかなびっくりという感じだ。手を離したら一巻の終わり。やり直しはきかないんだ。
ヒヤヒヤする。とても見てられない。

16

最初のひとりが太鼓橋に取りつくと、後は堰(せき)を切ったように渡り始めた。中には肩に子供を乗せた者や、首から怪我人をぶら下げた者までいる。危ないことったらない。

見る見る、太鼓橋の上は猿人で鈴なりになった。

洞内が揺らぐたびに動きが止まる。治まると、また移動を始める。ロープでもあれば楽なのだが。じれったいけど見守るしかない。

姉の姿が見えた。開き直ったようにスイスイと渡ってくる。しかし前がつかえてるので、なかなか思うように進めないようだ。

先頭がやっとこちら側に到着した。次々と降りてくる人たちは、緊張から解放されたことで、地面に転がって息を整えてる。

姉を含めて最後の一人が渡り終わるまで、大きな揺れが来なかったのはラッキーだった。

じつは密かに、姉がこちらに着いたら、すぐふたりで逃げ出そうと考えていた。ブラウン族は疲れ切ってるからチャンスだと。でも猿人キョウスケは抜け目なくぼくたちを見張っていた。残念ながらあきらめるほかなかっ

た。
気がつくと、誰も皆、対岸を見つめている。何を悠長に構えてるんだ。先を急ぐべきなのに。
彼らの視線を追うと、太鼓橋の向こう側にひと塊(かたま)りになった人々が見える。え？　まだ渡ってない人がいた？
――彼らは残ったの。
え？　どうして？　姉の顔を振り返った。
――重い傷を受けた人たちは、自分たちが重荷になることを恐れたのよ。
そんな……。
こちら側のブラウン族が見つめていたのは残してきた人々だった。名残を惜しんでいたのだ。
ふいに眼に涙が溢れた。猿人としては初めて流す涙が――。姉が不思議そうに見つめてる。
……ぼくはなぜか、ブラウン族の人々を残して逃げる気がしなくなった。助かるなら彼らもいっしょでなきゃいけない。見捨てることはできない。
「姉さん、またいつ地震が来るか分からないよ。先を急ぐよう、伝えてほしい」
姉は理解して、キョウスケに〝告げた〟。キョウスケは姉とぼくを睨みつけたが、すぐ全員に立ち上がるよう号令をかけた。
姉はサユリに抑えられ、ぼくは再び先頭を歩かされる

ことになった。
全員が後ろ髪を引かれながら、前進を始めた。残された者たちの想いを無駄にしないように。

17

進むべき道は明らかだ。猿人たちの背後から吹きつける風は、すべて眼の前の洞穴に吸い込まれてる。この先に地上へと通じる道がある。あるに違いない。そう信じるしかない。
しかしその洞穴は入ってすぐに二股に枝分かれしていた。左の道は、人ひとりが腕を広げたほどの広さで、上り坂が続いてる。右の道は、倍ほどの幅があるが天井が低く、下り坂になってる。
指先を湿らせて測ってみたところ、右の道のほうが空気の流れが大きい。
ここに到着するまでに、すでにかなりの距離を降りてきた。地表から何キロの深さにいるんだろうか。この先まだ潜ることには抵抗がある。早く空がみたい。
キョウスケが穴の分かれ目に近寄り、こっちだろう？という顔で左の穴をくんくんと嗅いでる。でもぼくの勘は右だ右だと騒いでる。なぜだろう。彼らを説得する根拠は何もないのに。

背後がざわざわと騒がしくなった。何ごとかと振り向くと、全員が後ろを向いてる。彼らの頭越しに、さっき渡った太鼓橋の岩が見えた。

その岩がまるで眠りからさめた生き物のように動いたのだ。岩を支えていた地面が大きくえぐれ、砂埃を空中に巻き上げた。やがて自分の重みに耐えきれなくなったのか、卵の割れ目に似たヒビを走らせ、ふたつに砕けてゆっくりと溶岩流の谷に沈んでいった。

これで本当に後戻りはできない。ぼくたちはその光景を、それぞれの思いを抱いて見ていたが、やがて自分たちの甘さを思い知らされた。

落下した岩が跳ね飛ばした溶岩の飛沫(しぶき)が、花火のように空を彩り、焼夷弾のようにぼくたちの頭上へ降り注いだのだ。

猿人たちは突然のことに我を忘れて逃げ回った。背中に直撃を受けて悲鳴を上げる者、隕石のような火の玉の下敷きになる者、あわてて溶岩流に飛び降りる者。まさに収拾のつかない状態だった。

「オーーーーーー」

姉の腕を掴んだままのサユリが一声吠えて、洞穴へと突進した。皆に「洞穴に逃げろ」と叫んだのだ。ぼくも追いかけた。猿人たちは火傷を負いながらも必死で付い

てきた。
しかし、二つのどちらの道を選べというんだ。
サユリとキョウスケはぼくを振り返った。
そのとき、頭上を小さな火の玉が流れ星のように飛び越えていった。首をすくめたぼくは、そこに意外なものを発見して、固まった。

18

「父さん！」
まぎれもなく、それは父さんだった。
父さんは光り輝いていた。
父さんはぼくにこう呼びかけた。
――タケル、ついて来い！
そして力強く駆けていく。
ぼくは膝から力が抜けて倒れそうになった。これはやっぱり夢の世界なのか。
――タケル、何してる！　こっちだ！
父さんは元気よく走りながらぼくを呼んでいる。
その声は揺るぎない自信と愛情にあふれていた。
ぼくは、懐かしさと安心感に包まれた。
父さんがこっちと言ったのは、右の洞穴だった。
父さんの足音が穴の中に反響している。

こうなったら夢でも夢でなくてもいい。
ぼくは後ろにいるキョウスケたちに向かって「こっちだぞ」と合図した。
そして父さんを追って右の洞穴に突入した。
光はすでに届かない距離だったが、父さんの顔が暗闇を照らすランプになった。
ぼくは父さんに遅れまいと必死で駆け下りた。

どのくらい走ったろうか。洞穴は行き止まりになることもなく、ぼくたちを導いた。ときどき見失いそうになると父さんはぼくが追いついてくるのを待って、再び走り出す。地震は絶え間なく洞内を揺らしていた。太鼓橋の落下が眠っていた地殻を揺り起こしたのかもしれない。だったら、なおさらゆっくりしてられないぞ。

急ぐ場合は四つ足で走ったほうが速い。その手足が痺れるほど疲れ、息が上がり、頭がもうろうとしてきた頃、広い空間に躍り出た。
そこは薄緑の光に浮かび上がった鍾乳洞だった。
突然現れた鍾乳石の列を見て、軍隊の待ち伏せと錯覚したぼくは思わずのけぞり、派手に転んだ。そこに後続が次々とやってきたもんだから、猿人のピラミッドができてしまった。

林立する鍾乳石のたもとには、水をなんなんと湛(たた)えた地底湖が横たわっている。湖面に近づいたぼくは顔を首まで突っ込んで、冷たい水をゴクゴクと飲んだ。空きっ腹に染(し)みる。

――美味しい？

姉が横にやってきて尋ねた。ぼくはうなずいた。

湖の底がぼうっと光ってる。それが天井や鍾乳石に反射して、あたり一帯を幻想的な舞台に仕立て上げている。声も出ない美しさだ。

――光りゴケなのよ。

19

「よく知ってるね」

ぼくは潤った喉を鳴らした。

――そうね。珍しいコケよね……。

姉はハッと息をのんだかのようだった。

そのとき誰かがぼくは背中を蹴飛ばした。もんどり打って一回転したぼくは、湖の中へ頭から落下した。あわてて水面に浮上すると、キョウスケやサユリがこちらを睨んでいた。顔つきを見れば言いたいことは分かる。

姉が手を貸して、すくい上げてくれた。

キョウスケは噛みつかんばかりに顔を近づけて吠えま

くった。
『こんなところまで引っ張りこみやがって、どこに出口があるってんだ!?』
そう言ってるのだ。ぼくには返す言葉もない。〝父さんの霊〟の導きだと言ったところで、誰にも理解できないだろうし。
サユリがキョウスケに肩を寄せて、何やら言葉をかけた。キョウスケはチッと舌打ちし、サユリと共に離れていった。
――とにかく周囲を調べてみようということになったみたい。
姉はそう言い、ぼくの濡れた体を手で拭った。
――でも、もしかしたらここは……。
言葉が途切れた。ぼくも気づいた。
妙な匂いがするのだ。それも強烈で、なんとも表現しようのない、うっとりするような香りだ。
ぼくと姉は腰を上げ、匂いの元を確かめようと歩き出した。周りにいた他の猿人たちも、同じように妙な顔をして、同じ方向に歩いていく。
やがてぼくたちは鍾乳石の陰で口を開けているマンホールのような穴の前に群がった。匂いはその中から漂ってくるのだ。何なんだコレは？
甘酸っぱくてどこか懐かしい感じがする。米沢の家に

いたとき、誕生日に食べたケーキを思い出す。チョコ、生クリーム、イチゴ、……。

——しっかり！

姉がぼくの頬をパシッと叩いた。おかげで夢想の世界から戻ることができた。頭を振って穴を見直すと、ブラウン族たちがひとりまたひとりと香りに誘われるまま、穴に降りて行く。誰もが眼をとろんとさせ、だらしなく口を開いている。

——覚えてない？　これは地底世界のあの花の香りよ！

ぼくは姉に見せられた映像を思い出した。紫の水玉模様で彩られた花びら。素晴らしい香りと極上の蜜で猿人たちを虜（とりこ）にする、あの巨大な花。

するとこの穴の先は——。

20

——地底世界につながってるのよ。

姉は顔をこわ張らせながら断言した。

——光りゴケは地底にしかないし……。

姉は気づいてたんだ。ぼくたちは地底世界のすぐそばまで来ていると。

そうしてる間にも、ブラウン族たちは次々と地底世界

へ続く穴に足を踏み入れていく。
止めなきゃ！
ぼくは彼らの前に飛び出した。肩を揺すったり、腕を引っ張ったりしてみたが、うつろな目でぼくの手を払いのけるだけだ。まるでハエを追い払うように。頭の中は匂いの妄想が充満してるんだ。
――私たちベージュ族は、ある程度慣れているけれど。知ってる。「免疫」っていうんだ。
口からだらしなくよだれを垂らす猿人たち。ぼくと同じでみんな丸一日何も食べておらず、十分に空腹だった。巨大花の匂いはそんな胃袋を直撃したんだ。
「ウオオオオオ（止まれええええ）！」
叫んでみても誰も耳を貸さない。キョウスケでさえ、ものすごい形相で降りて行ったんだ。ぼくたちに打つ手はないのか。
目の前をよたよたと引きずるような足が通り過ぎていった。見上げたぼくの口から「ああ」と声が漏れた。
小さな子を抱えた女性だった。
あのとき。
地割れの縁（ふち）につかまっていた子猿。
木の実をお礼代わりにくれた母親。
子猿の眼がぼくの眼と合った。彼はキィッとひと鳴きすると、母親の手を離れて近寄ってきた。穴に吸い寄せ

られていた母親も子猿の後を追ってきたが、ぼくの顔を見て立ち止まった。

この群れにいたとは知らなかった。

この世界に来て初めて出逢った猿人の母子。

子猿……いや子供がぼくの背中に登ってきた。覚えていてくれたらしい。母親がぼくから子供を引き剥がそうとする。ぼくは子供を背負ったまま後ずさりした。母親が怒った仕草で近寄ってくる。また逃げる。こうでもしないと助けられない……。

ふいに背中の子供が消えた。あれっと思う間もなくドンと突き飛ばされ、鍾乳石に頭をぶつけて眼から火花が飛んだ。痛みをこらえて見上げると、サユリが片手に子供を抱いていた。母親が安心した顔で彼に寄り添っている。

そうか、サユリが父親だったのか。これは面倒なことになってしまった。

21

顔つきだけでなく、ボブ・サップのような体格まで人間サユリに似た猿人サユリに比べれば、ぼくなんて虎の前でおびえるウサギみたいなもんだ。片手で山の向こうまで放り投げられてしまう。でもせめて彼をどうにかし

ない限り、ブラウン族たちを救うことはできない。
サユリは眼をいからせ牙をむき出してぼくを威嚇した。邪魔するな、と。
さらにぼくの首をつかもうと腕を伸ばしたとき、姉が駆け寄って、彼の眼の前で両手を広げた。
サユリの手がとまった。表情が変化した。うっとつばを飲み込んだような顔にとまどいの色を見せた。姉が彼を睨みすえる。
サユリはなぜかバツが悪そうに体を引いた。しばらく姉に鋭い視線を投げつけていたが、やがて心配げな妻子をうながして穴に向かおうとした。
――彼の気を惹いてちょうだい。
姉はそう言ってぼくのそばを離れ、足音を立てないよう注意しながら、鍾乳石の林の中に入っていった。何か算段があるに違いない。ぼくはそう合点して身を起こした。
サユリ親子は雲の上を歩くような足取りで地底世界への入口へと近づいていく。相変わらず花の匂いが効いてるらしい。油断はある。
ぼくはサユリの左足に飛びついた。そしてその丸太のような太股の裏側に思いっきり噛みついた。
アアア〜〜という声をあげてサユリはぼくを払いのけようとした。それに耐えてもうひと噛みすると、彼はた

まらず、音を立てて地面に倒れた。
これでいいのか？　と顔を上げると、姉が飛び出してきて、サユリの後頭部に飛びつき、両足を太い首に巻き付けた。
さらに姉は両腕で彼の頭を抱え込んだ。その瞬間サユリの体はビリビリと、まるで電気ショックに打たれたように震えた。伸びた手足が空を掻いた。
姉は渾身の力でサユリの頭部を絞り上げてる。でもその程度で彼がダメージを受けるとは思えない。ぼくは不思議に思いながらも、じじつサユリは反撃せず、じょじょに手足から力が抜け、おとなしくなっていくのに驚いた。
ようやく静かになると、姉はサユリから離れた。サユリは気絶することもなく、開いてる眼は左右を泳ぎ、ぽかんと口を開けたままだ。
ぼくは姉に駆け寄った。肩で息する姉は、
――完了。
そう言ってぐったりした顔をぼくに向けた。
完了？　どういうこと？

22

姉の息は激しく乱れ、全身汗みずくで、手をあげるの

も億劫だという顔をしていた。さっきまでとは別人のようだ。いったい何をしたの？

それでも姉はぼくに抱きかかえられ、半身を起こすと、サユリのほうへさぐるように眼をやった。ぼくもつられて彼を見た。

サユリはその巨体をむっくりと起きあがらせていた。彼の眼がこちらを向いた。姉を見ている。さっきまでとは眼の色が違ってる。

――彼にも見せてあげたの。

な……なにを？

――あなたに見せてあげたのと同じものをよ。地底世界のようす、そこでの暮らし、そしてどうやって滅びたかということを。……あの匂いの正体は何か。そして、いま地震や火山の噴火がひんぱんに起こってるときに、地底世界に降りていくことがいかに危険かということも。

それを彼の頭の中に一気に流し込んだの？

――いいえ、彼はわたしをずっと捕らえて放さなかったでしょ？　その間に少しずつ覗かせていたの。だから彼との間に道ができていた。時間がなかったので一気に見せたら疲れちゃったけど。

ぼくは感心した。彼らから逃げ出すことより、仲間に引き入れる可能性を考えていたんだ。

……でも真実を知って本当にぼくたちの味方になって

くれるかどうかは、賭けだ。ぼくたちの身の安全が保証されるとも限らないし。

果たして彼は……。

サユリは、しびれが抜けたかどうか確認するように両手を握ったり開いたりしていた。

そして次の瞬間なにを思ったのか、急に立ち上がると、穴とは違う方向に向かって駆け出した。

驚いて見ていると、彼は湖にザブと飛び込んだ。

ひょっとして頭の中に押し寄せた映像が、彼を狂わせたんじゃないだろうか？

湖に入ったサユリはなかなか出てこなかったが、浮上した彼の両手には引きちぎられた光りゴケが山のように握られていた。そして湖からあがり、ぼくの前に来ると片手を差し出した。おそるおそるそれを受け取ったが、絶対に狂ってる！　なんと彼は光りゴケを自分のふたつの鼻の穴に突っ込んでいるのだ。彼はそのままの顔つきで、どうだというしぐさをした。

――これで匂いはかげないだろ、と言ってるわ。

……なるほど。

彼は「さあいくぞ」という身振りをした。そして妻にコケを手渡すと、地底世界の穴に向かって走り出した。口ですうはあと呼吸しながら。

23

「姉さんはここで待ってて！」

言い置いてぼくはサユリの後を追った。

ありがたくもらった光りゴケをむりやり鼻の中に突っ込んだ。くしゃみが出そうだ。

地底世界へつづく穴のそばには、非情にもうち捨てられた重傷の猿人たちが数人倒れていた。巨大花の威力を見せつけられる思いだ。

穴はマンホールのようにきれいな円形をしている。そこに天井から水滴がポタリと落ちた。おそらく自然の力が気が遠くなるような年月をかけて、この穴を開けたんだろう。

3メートルほど下に底がみえる。その先は見えないが、ヒューッと風の通る音がする。

まずサユリが飛び込んだ。ぼくは後ろ向きで壁を伝って降りたが、手がかりも何もない。わっと声をあげたら尻からドシンと落下していた。

帰りはどうしよう……。

底には予想どおり、横穴が開いていた。サユリとぼくの眼に、遠ざかっていく猿人たちの後ろ姿が映った。サユリは一足飛びに最後尾のひとりに近づくや、横っ面をグーで張り飛ばした。

なんて乱暴な！

でもそうするより他に方法がないことをすぐに理解した。彼らを説得してUターンさせるのは無理なのだ。サユリはふらふら歩いていたもうひとりを殴り倒すや、両脇に抱え上げて来た道をとって返した。そして井戸の底から交互にふたりを穴の上めがけて放り投げた。

荒っぽいにもほどがある。人間のレスキュー隊員には絶対できない芸当だ。

ふたたび彼は走り戻っていく。目顔で「おまえもやれ」と言っている。

悩んでるひまはない。サユリは次々と殴り倒してはてきぱきと運んでいくのだ。そして放りあげる。まるで流れ作業のように。

取っ組み合いのケンカなんて一度もしたことのないぼくが人を殴る？　彼らを救うためには殴るしかないのか。

究極の選択だ。

ひとりの猿人のまえに立った。彼は魂の抜けたような顔でぼくをながめ、興味なさそうに脇をすり抜けようとする。ぼくは眼をとじて、彼の頬めがけてパンチを出した。

ぺちっ。拳の先はたしかに当たったぞ。殴ったぞ。おずおずと眼を開ける。彼は頬をさすりながらボーっと立っている。まったく効いてない！

その彼が横壁にすっ飛んだ。サユリがけとばしたのだ。見てらんねえぜという顔をしてる。

24

またたく間に十人ばかりを病院送りにしたサユリは手をゆるめず、次々と獲物を捕らえてはその暴力の餌食にしていった……人助けのために。

何の役にも立たないぼくが言うのもヘンだけど彼はよくやった。殴っては運んで投げの繰り返し。

しかし彼にも疲労の色が見えてきた。花に誘われた猿人たちは先に進むし、彼らと縦穴の間を行きつ戻りつするわけで、戻り道は登りだ。道はデコボコなので歩きにくい。サユリのペースはじょじょにダウンしていった。鼻に突っ込んだコケもいつまで保つか分からない。

ぼくは気絶した猿人を運ぶ役だけまかされた。それでも十分に重労働だった。意識のない人がこんなに重いとは想像もしなかった。

サユリもぼくもヘトヘトになっていた。猿人たちの先頭は、ずっと先に行ってしまったようだ。「とにかく先頭まで行ってみよう」とぼくはジェスチャーで伝えた。サユリもうなずいた。

肩で息をしながら先頭集団を追いかけたが、彼らの姿はすでに横穴には見当たらなかった。ぼくたちはあきらめずにどんどん奥へと入っていった。そしてついに横穴の出口にたどりついた。

ぼくたちが出たのは岩棚のような場所だった。

ここからの風景をどう表現すればいいだろう。これほど現実離れした景色を見たことがない。

見おろしてるのは、まぎれもなく地底世界だ。でも姉が見せてくれたのとはまったく違っていた。

岩棚から地底の地面までの距離はビル5階ぐらいか。はるか地平線の向こうまで、同じデザインのパターンが繰り返し横たわっている。

花・花・花・花・花。

紫の水玉模様をした、巨大花の絨毯。

見渡す限りの花が地表を埋め尽くしてるのだ。

こんなに毒々しい眺めは初めてだ。

空気まで赤っぽくかすんでいる。これは花が飛ばした花粉なのか。異様な濃さだ。あんなに離れた場所にいた猿人たちがマイッたのもうなずける。

この世界は、なぜこんなに変わったんだろう？

地表の真ん中を太い川が横切ってる。溶岩の川だ。気温が高いのはそのせいか。ぼくの父母らの故郷のはずなのにこれじゃ住むのは無理だ。

気温の上昇がそもそもの原因かもしれない。巨大花にとっては好都合だったわけだ。
地底世界は花に征服されてしまった。姉が知ったら悲しむだろう。岩棚を囲む壁面まで、いちめんのつる草に覆われてる。真っ赤なムチのようで毒々しさ満点だ。

25

残りの猿人たちは岩棚の端っこにいた。岩棚といってもそこは自然の産物だ。平べったい棚のようなものじゃなく、ちょっとした崖の突起ていどで、端っこなどは急角度で落ち込んでおり、立っていられるもんじゃない。
猿人たちは、道がここでとぎれてるので、つる草と、とびとびに生えている巨大な葉をハシゴ代わりにして地底世界の地表まで降りて行こうとしていた。
なにしろ足もすくむような高さだ。強い風も吹いてる。それでもこわがる素振りもなくつる草に飛び移っていくのは、さすが樹上生活になれた猿人だからか、それとも花の匂いに毒されているからなのかわからない。
サユリとぼくは息せききって彼らに近づいた。
キョウスケがいた。ぼくらの足音に気づいて振り向いたようだが、目はうつろなままだ。
問答無用なサユリはいきなりこぶしを振るった。しか

しこぶしは空を切った。キョウスケが腰をかがめてよけたのだ。彼は眼にもとまらぬ速さでサユリを足払いにかけた。サユリはもんどり打って倒れた。危ない。ここはもう岩棚の端っこに近い。ひとつまちがえればそのまま落下だ。

サユリは倒れたまま注意深く体勢を立て直した。

キョウスケの眼に異様な光がやどってる。さすがにブラウン族のリーダーだ。花に狂わされても体は身をまもることを忘れない。

サユリはあおむけのまま、じりじりとキョウスケに近づいた。そして左で蹴ると見せかけて右のキックを見舞った。フェイント攻撃だ。しかしキョウスケには通用しなかった。彼はサユリの動きを見切ったように、振り下ろされた足を脇にかかえるや、ガブリと噛みついた。サユリはたまらず悲鳴をあげた。

そのままキョウスケは、肉を食いちぎらんばかりに頭を振りまわすと、吐き捨てるように放り出した。顔面が血まみれだ。サユリは右太股を真っ赤にしてのたうち回っている。

勝負あった。

キョウスケは勝ちどきのおたけびをあげると、何ごともなかったように、つる草に飛び移った。最後にニヤリと笑ったような顔を見せると、そのまま下界に降りて

いった。
岩棚の上にはサユリとぼくだけが残された。ウンウンうなる彼の手の間から血がしたたり落ちている。ぼくはどうすればいいかわからず、彼のそばにしゃがんで、ほおを叩いた。サユリは痛みにたえて眼を開けたが、首を横にふった。

26

サユリはなんとか自力で起きあがろうとした。彼の体を汗が滝のように流れ落ちる。四本足歩行がメインの彼らにすれば、三本でもなんとか歩けるのではと思ったが、サユリはうなり声をあげて倒れてしまった。噛まれたところが紫色に腫(は)れあがってる。もしかすると巨大花の花粉が傷口に侵入して化膿したのかも。
彼は再び立ち上がるのは無理そうだった。
周囲には誰もいない。おりてきた穴ははるか向こうだ。不気味な振動のつづく中、グロテスクな世界にポツンと残されて……どうする。
いけない！　頭の芯がぼおっとしてきた。鼻につめたコケが乾いて防毒効果がなくなってきたんだ。免疫のあるぼくでも長時間は危険だ。
早くなんとかしないと。なにかないか。

焦りまくる眼があるものをとらえた。これだ！
岩棚の端に寄って腕を伸ばして一本の太いつる草をつかみ、力まかせに引っぱった。ブチブチとつる草は壁面からはがれ、巨大な葉っぱに手が届くまでたぐり寄せると、かたわらに転がっていた鋭い石を叩きつけて、十分な長さのつる草を切り落とした。
次に、サユリの巨体を転がして、葉っぱの上に寝転がらせた。なんとか首から尻までが葉っぱの中におさまった。
最後に、つる草を自分の体にぐるぐる巻きにして完成だ。ぼくは両手両足をふんばって、つる草を引っぱった。
重たいタンスを動かすとき、タンスの下へ新聞紙を敷くのと同じ要領だ。
岩棚の上はでこぼこしていたが、葉っぱが意外に丈夫だったのがよかった。少しずつだがサユリを乗せた葉っぱが動き出した。

横穴の入口にたどりつくまでに途方もない時間がかかってしまった。ここからは登りだ。すでに腰にキリキリ食い込んでくるつる草にかなりエネルギーを奪われていた。気が遠くなりそうだ。
ふと耳がヒタヒタという音をとらえた。姉が数人の猿人を従えて駆け下りてくるのが見えた。

――まあ、ひとりでこんなことを……。
姉はすぐにつる草を解くと、連れてきた体格のいい猿人に交代させてくれた。彼らはしっかりと鼻栓をしていた。
縦穴まで来るのにそう時間はかからなかった。そしてそこに組み体操で作られた〝猿人ハシゴ〟を発見したとき、こういう工夫の積み重ねが進歩を生むんだと素直に感動してしまった。

27

大半の猿人たちは救うことができた。キョウスケら一部の人たちは残念だったけど……。
物思いにふけるぼくの尻を姉が荒々しく叩いた。
――早く上にあがりなさい！
そんなにせっつかなくたって。ぼくは猿人たちの肩に足をかけさせてもらって、猿人バシゴを一気に登った。サユリもつる草で体を縛って、みんなが力を合わせて引き上げた。
元の鍾乳洞だ。離れたところでは、小猿の母親が中心になって、サユリに殴られた猿人たちを介抱している。花の匂いの届かない場所を見つけたようだ。
しかし、みんなあわただしく動いてるのが気になった。

ぼくは姉をつかまえて理由を尋ねた。
――ごめん！　言うの忘れてた。近づいてきてるのよ。
姉はぼくたちのやってきた洞穴を指さした。言われるままに覗いてみると、かすかにゴゴゴと不気味な音がする。ぼくは見通せる曲がり角まで登ってみた。
明るいものが降りてくる。それは溶岩流だった。とうとうここまで押し寄せてきたんだ……。
あわてて鍾乳洞まで駆け戻った。みんなは溶岩に気づいて、逃げる先を必死で探していたんた。
光りゴケがほの明るく照らす鍾乳洞の周囲には、数多くの洞穴があった。猿人たちはそのひとつひとつをあわただしく調べている。
ぼくは大きな鍾乳石のひとつによじ登った。そこからは鍾乳洞の全景を見通すことができた。

予感がしたのかもしれない。そしてそれは正解だった。まだ誰も調べてない洞穴のひとつが周囲とは違う色彩で光っているのに気づいたのだ。
鍾乳石をおりて、その穴に近づいた。
そこに〝父さん〟がいた。
ここまで導いたのは亡霊では決してなかった。
それは――黄金の塊（かたまり）だったのだ。
太鼓橋の岩が溶岩流にくずれ落ちた際、川底に眠って

いた塊は、はじき飛ばされてぼくたちの頭上高く飛び越え、洞穴の中を跳ね落ちていった。溶岩で熱せられていたから輝いて見えたんだ。

塊が父さんに見えたのも無理はない。

父さんの笑った顔にそっくりの形をしている。

特徴的な鼻筋なんか生き写しだ。

……よくここまで転がってきたもんだ。

ぼくはこの塊を追いかけてここまで来た。

そしていま、この小さな洞穴の前にある。

ぼくは黄金塊越しに、中のようすをうかがった。

28

そこは真っ黒な闇がつづいており、深さをうかがい知ることができない。二、三歩も入るとどちらが上だか下だか分からなくなった。おまけに両手をひろげなくても左右の壁に届くほどのせまさで、見た目にはなんの手がかりもない。

それでもわずかに期待をもたせるのは、風だ。極端なせまさのためか、ヒュルルルという音を反響させながら吹き抜けてる。どこかへ通じてることはたしかだが、また地底世界へつながってたりしたら今度こそ気力が消し飛んでしまうだろう。

ぼくは明るい入口をふりかえった。そこには黄金塊がデンと座ってる。こちらから見ると父の顔と似ても似つかない。ごつごつしたふつうの塊だ。でもこのままここに置いていく気にはなれないな。そう思って手を伸ばしたときだ。

ンモロゴロゴゴゴゴゴゴ……。

複雑に混じり合った音が遠くから聞こえてきた。それはぼくがこの世界で初めて聞いた地響きを思い出させた。眼の前の世界が奇妙にゆがんだ。ぼくは吐き気におそわれて、壁にもたれるとそのまま座り込んだ。

いくつもの太鼓が重なり合ったような音が頭の中で鳴りやまない。猿人たちがわあわあ騒いでいるのが遠い津波のように聞こえてくる。

この世界に初めてやってきたときと同じだ。頭の中がチカチカして鼻を刺すにおいが漂ってくる。

『この世界にいられるのは、もうそれほど長くはない』

そんな考えが浮かんだ。本当だろうか。だとすればぼくはこのまま地の底で死んでしまうのだろうか。姉や猿人たちとともに地上の太陽を見ることなく、ここで朽ち果てるんだろうか。

ンモロモロモロモロモロモロ……。

音はじょじょに遠ざかっていった。幾本かの鍾乳石がポキンと折れて落ち、その横で猿人たちがかばっていた

頭から手を離すのが見えた。
この洞穴はパスするか……。そう思って立ち上がった眼に信じられないものが映った。さっきまで闇で塗り固められていた洞穴の奥に一条の光が差し込んでいるのだ。
眼を疑ったが、体は正直に反応してぼくはその光の落ちるところまで飛ぶように駆けていた。
コロコロと落ちてくる石を注意深く避けながら見上げると、その光はとても低い角度ながら、まぎれもなく太陽の光だった。
やったぞ、ついに地上に戻れるんだ。
思わずガッツポーズで喜びをかみしめるぼくの耳に、喜びとはちがう悲鳴が背後から聞こえた。

29

なにを騒いでるんだ、ぼくたちは助かるんだぞ。早くそのことを伝えてやろう。そう思って戻ってみると、まるで風呂場に足を踏み入れたような熱気があたりに充満していた。なんだこれは？
なんと、さっきの地震でできたと思われる新たな壁の裂け目から、溶岩が勢いよく噴き出しているのだ。やってきた洞穴ばかり警戒していた猿人たちは突然のことにパニックにおちいり、右往左往していた。

ぼくは足元の黄金塊を脇にどけて大声で吠えた。できるだけ全員がこの穴に注目するよう、のども裂けんばかりの甲高い声で叫んだ。

猿人たちを介抱していた、あの母親と子供がいち早くこちらに顔を向けた。子供が無邪気に駆け寄ってきた。ぼくは抱き上げて母親の手をとり、あの洞穴に行けと指さした。彼女は夫であるサユリに眼を落とした。彼はぼくがつる草を巻いて止血した足を伸ばしたまま、噴出する溶岩を見ていた。ぼくは姉の真似をして彼の腕に手を触れると「みんなを連れて行ってくれ」と心で語りかけた。通じたのか、彼はまじまじとぼくの顔を見上げるや、三本足でおもむろに立ち上がり、みんなに行くぞと号令をかけた。

ぼくは各所に散らばっていた猿人たちに声をかけて走り回った。噴き出る溶岩の量も速さもはんぱじゃない。ぼくは彼らを急がせた。

鍾乳洞はみるみるうちに熱いじゅうたんに覆われていった。流れの先端は光りゴケの湖水へも達し、じゅううと大きな音をたてて蒸気をあげた。

長くもたない。ぼくも猿人たちのあとを追おうと向きをかえたとき、鬼のような形相をした姉が逃げもせず、煙の中にたたずんでいるのが見えた。

溶岩の流れは鍾乳洞の中央に達しようとしていた。ぼ

くはそれを大きく迂回して彼女のそばに駆け寄った。接近する僕に気づいた彼女はもたれていた大きな岩から体を離した。

「だめだよ！　早く逃げなきゃ！」

ぼくは姉の腕をつかんで引っ張っていこうとしたが、彼女はそれを足を突っ張らせて抵抗した。

――この岩を動かさないと。

「どうして⁉」

――あそこ。

岩の先に、地底世界への穴があった。

――この岩でフタをするの。

ウソだろ？　危険がすぐそこに迫ってるというのに。

姉はぼくに背を向けて岩を押し始めた。

「無理だよ。こんな大きな岩」

ぼくは顔をしかめたが、姉は気にしていない。

30

「こんな小さな穴をふさいだぐらいじゃダメだよ。あっちこっちの壁が割れてるんだから、溶岩はいろんなところから流れ込んでるよ」

言っても姉はいっこうに耳を貸そうとしない。ぼくはさらに言いつのる。

「地上につながってる道を見つけたんだ。早く行こう。溶岩がすぐそばまで来てる」
すると、姉の肩に置いた手をとおして、彼女のつぶやきが伝わってきた。
――降りていった人たちを見殺しにはできない。
かぼそいが強い決意を感じる。しかし……。
「だって自分から進んで降りていったんじゃないか。助けようとしたぼくらに牙を向けたし」
姉は腰を折ってひと息つくと、ぼくのほうを向いてにらんだ。
――自分から進んでですって？
ぼくは彼女のけんまくにたじろいだ。
――あの花に誘われたら誰でもああなるわよ。自分の意志なんかじゃない。それに……むかし逃げ遅れたわたしたちの仲間が生き残ってるかもしれないじゃない！
「姉さんは今の地底世界を見てないから言えるんだ」ぼくは力を込めて反論した。「むかしのおもかげなんかない。あそこは毒々しい花がいちめんに咲いて、完全に征服された――」
――知ってるわよ。
姉はその場に座り込んだ。ぼくもかたわらにかがみ込んで姉の顔をのぞいた。
――あなたを助けに降りたとき、あなたが直前に見た

映像をのぞかせてもらったわ。……ごめんね、断りもしないで。でもね――。
顔をあげた姉の顔はまるで泣いてるようだった。
――どんなに変わっても、あそこはわたしの生まれ育った場所なの……。
その瞬間、ぼくは自分の心ない言葉を恥じた。姉にとって地底世界は今でも聖なる場所なんだ。
ぼくは立ち上がって岩に手をかけた。
「急ごう。早く穴に落として逃げよう」
姉はハッとしたようだったが、すぐに立ち上がり、ならんで岩を押し始めた。
気温はどんどん上昇してる。鼻も肺の中も燃えるように熱い。
ほんの少し浮きはするものの、岩はなかなか動こうとしない。ぼくたちには荷が重すぎる！
『おれの仕事だ』
突然頭上から声がして、岩がぐらりと動いた。そのままごろんと転がると、いとも簡単に穴をふさいでしまった。声の主はサユリだった。

31

このときほど彼を頼もしく思ったことはない。ほんも

ののボブ・サップにも勝てるかも！
感激のあまりぼくは彼の腕を握りしめようとした。ところが逆に彼はぼくと姉に倒れかかってきた。体が火のように熱い。
――むちゃくちゃして！　死ぬわよ。
姉はまるで姉弟のような口調でサユリを叱った。サユリのほおがわずかにゆるんだ。
『だってよ、あんたらはおれの命の恩人だ』
そう言いながらぼくらの腕につかまって、なんとかそばの岩に腰をおろした。むくんだ右足はまったく使えないようだ。
「こんなとこまで、よく来てくれたね」
『あんたらはどうか知らねえが、おれたち一族は義理堅い』
そう言うと、今度こそほんとうにニヤッと笑った。なるほど猿人が笑うとこんな顔になるのか。たぶん新出博士や学者の誰ひとりとして想像すらできないだろう。すばらしくいい顔だ。
――さあ、いくわよ。
姉のひと声を合図に、ぼくたち三人は目指す洞穴へダッシュした。すでに鍾乳洞の半分が溶岩流によって飲み込まれていた。湖があげる水煙が視界を悪くしている。ぼくたちが向かおうとする道は、いく筋もの溶岩が通せ

んぼしていた。
『おれの跡を付いてきてくれ！』
そう叫ぶとサユリは溶岩の中に躍り込んだ。そして驚く姉やぼくをしりめに、器用な足さばきで溶岩の中に残る鍾乳石をつたい渡っていく。きっと最後の死力を振りしぼってるんだ。姉もすぐに後を追って飛び込んだ。
迷っていれば確実に死ぬ。やぶれかぶれだ。ぼくも最初の足場へと大きく跳躍した。
煙が眼にしみる。呼吸が苦しい。ベージュの体毛がチリチリと焼ける。爆ぜた石が首筋を直撃する。一瞬の油断もできない障害物競走。
生きた心地もしないのに、心の中では自分の運動能力に驚いていた。サユリや姉もぼくも、まるでスーパーヒーローみたいだ。恐ろしく広い溶岩流の上を飛び越え、わずかな地面の出っぱりを足先でつかむ。以前、博士が「われわれ人類って、猿人より進化してると本当に思ってるのかねえ」と言ってたのを思い出した。
溶岩流の足が速い。すでに洞穴の入口はゆっくりとした流れに浸され、さらに第二波が迫っていた。サユリは体を真一文字にしてこれを飛び越え、姉とぼくもつづいた。
父の黄金塊はすでに溶岩に飲み込まれていた。

32

タッチの差だった。あと一呼吸おそかったら、ぼくたちは洞穴に飛び込むことはできなかっただろう。それほど溶岩の流れは速かった。洞穴に転げ込み、立ち上がって入口をふりむいたとき、鍾乳洞は――鍾乳洞だった空間はすでに溶岩によって覆い尽くされ、ぐつぐつと煮えたぎる地獄と化していた。

父さんの黄金塊をさがすのは不可能だった。ぼくは立ち止まり、思わず合掌していた。ここまで連れてきてくれてありがとう――。

『ウオオオオオ』

サユリの声がせまい洞穴に反響した。必死で駆け上る姉とサユリを、細く強い太陽光がスポットライトのように照らしている。その背中にはいくつもの焦げあとが見える。サユリは右足をかばいながらも絶妙のバランスで登っていく。ぼくも全力疾走で彼らを追った。

道行き――といっても地割れでできた隙間だったが――は楽じゃなかった。急傾斜の山をよじのぼる感じで進む。反りかえるように登らないといけない瘤(こぶ)があったり、足をすくわれるような裂け目がのぞいていたり。それでもぼくたち三人は太陽光にたぐり寄せられて、ひたすら進んだ。

そのとき耳をつんざく音がとどろいた。思わず足を踏み外しそうになってあわてて踏ん張り、肩越しにふりかえると、恐怖で全身がそそけだった。
はるか下に見える洞穴の入口が真っ赤に燃えている。それればかりでなく燃えさかる火が穴をペロペロとなめながらぐんぐんこちらに近寄ってくる。
溶岩じゃない！　マグマだ！
とうとう火山の動脈が切れた！
マグマは巨大な蛇のように頭をもたげ、ぼくたちを容赦ないスピードで追いかけてくる。
「急げ！」
ひきつった顔をこちらに見せていた姉とサユリも、ぼくの叫びに応じたように手足の動きを加速させた。
背後からマグマが押し上げてくる空気が無言の圧力となって恐怖をあおる。それでもひたすら、眼を射るような太陽の光に向かって、黒い土に爪を立て、岩を足でけって、前へ、上へと進む。
これまでの苦労がむくわれるか、無駄におわるのかは、この一瞬一瞬にかかってるんだ。
天国はもう眼と鼻の先――地獄もすぐ足の下だ。
ぼくはもうなにをしてるのかわからなくなった。
それでも上る、登る、昇る。
とつぜん体が軽くなった。

眼の前が真っ白になった。

33

木の葉のようにぼくの体は天高く舞い上がった。
眼に入るものすべてがくるくる回っている。
そして「落ちる！」と感じた瞬間、ぼくの背中は地面に叩きつけられていた。
さらに二度三度とバウンドし、ぼくの体は大の字になってようやく止まった。体が金縛りにあったように呼吸がうまくできず、激しく咳き込んだ。
ウオオーーー。ガオオオオオーーー。
遠くから猿人たちの叫びが聞こえた。危険を感じてハッと顔を上げると、太陽の光をさんさんと浴びて天に昇ろうとする竜の姿がそこに――。
いや、竜に見えたのはマグマだった。水鉄砲のように洞穴から噴き出したマグマが空に弧を描き、まさにぼくの頭上へ、その巨大な頭をふり下ろそうとしていたのだ。
あわてて膝を立て、ぼくは逃げた。噴出の勢いが良すぎたため、竜の頭が落ちてくるまで数秒の間があったのが、ぼくにとって幸いした。
どどーんという音をたてて地面に落ちたマグマは、そのまま流れをゆるめずに斜面を滑り降りていく。行く手

にある背丈の低い木が次々と飲み込まれていく。
その光景を、眼を見ひらいてながめていたぼくのそばに姉がやってきた。
――やったね。地上に出られたのよ。
そうなのだ。ぼくはまわりに寄ってきた猿人たちの姿を見てようやく実感した。姉のうしろにはブラウン族の生き残りが顔を並べている。サユリも地面に寝て右足をさすりながらこちらに視線を送っている。そのわきにはあの母子の姿もある。
助かったんだ。
太陽が山のいただきを離れて、少しずつ高度を上げていた。ということは、あのとき見た光は朝日だったのか。
しかし太陽と反対の空に眼を転じると、もくもくと立ちのぼる煙が見えた。噴火はまだつづいている。空の半分がネズミ色の雲で覆われていた。
斜面のへこみに沿って流れていくマグマは、のたうつ竜の姿そのものだった。あの中に飲み込まれていたら骨も残らず焼かれてしまっただろう。
竜はやがて地獄の世界へ戻っていこうとするかのように、谷底へと流れ落ちていった。
ウオオーーーーーーイ。
別の方向から声がした。そちらを見たぼくは、姉とともに喜びの声を上げた。

大男さんだった。彼がベージュ族の仲間たちをひきつれ、丘の上からこちらへおりてこようとしていた。

34

ドォーン。竜が尻尾をばたつかせ、最期の一噴きを空に撒(ま)いた。溶岩に混じって大小の石が音を立てて落下したが、そのひとつがキラリと輝いた。
近くへ寄ってみる。やはり〝父の黄金塊〟だった。

ぼくや姉の体はやけどだらけだったけど、大男さんはすり傷や切り傷だらけだった。聞くとあの後そうとう苦労したらしい。ぼくたちと離ればなれになって湖から上陸し、崖からはげ落ちる岩を避けて密林に分け入り、崩れた崖を発見してどうにかそこを踏み越えて、ようやく〝溝の帯〟を抜けることができたという。父や義母らも無事だと聞いてぼくは大男さんの手を取って何度も頭を下げて感謝した。しかしそんな人間じみた感情表現を知らない大男さんは、ただただ眼を丸くしているだけだった。

大男さんの報告によれば〝溝の帯〟のこちら側は森林が少なく、ほとんどが低い木で、木の実が少ないという。

そんなわけでひとまず怪我人を残し、数人の仲間を連れて食料さがしに出てきたところ、ぼくたちと思わぬ再会を果たしたということらしい。

お互いの無事を喜びあったあと、ぼくは大男さんらをブラウン族に引き合わせた。今やブラウン族の長となった猿人サユリが大男さんとあいさつを交わした。最初のうちは信じられないという顔をしていた大男さんも、すぐに彼らとうち解けた。

大男さんによれば、ここは〝溝の帯〟からずっと離れた場所だという。隆起した崖のずっと北東にある丘の裾野だという話だ。思えば本当に遠くまで来たものだ。

その夜はベージュ族ブラウン族がともに膝を交えておそくまで語り合った。

ぼくは〝父の黄金塊〟をみんなの前に出して、これがぼくを導いてくれたことを明かした。誰もが驚いたようだった。これがなかったらぼくらは助からなかったと言うと、サユリは違うと言った。

『あんたは自分で判断して行動したんだ』

その言葉に大男さんも、姉もそうだと言った。

本当だろうか。いろんなことが立て続けに起きたので、まだ自分の中で整理できてない。やっとひと心地ついたから、これからゆっくり考えよう。

サユリの子が〝父の黄金塊〟をいじって遊んでる。――父さん、ぼくはせいいっぱいやったよ。ぼくは『行い正しき者』だったかな？――

その夜、ぼくらは久びさの安眠を楽しんだ。